

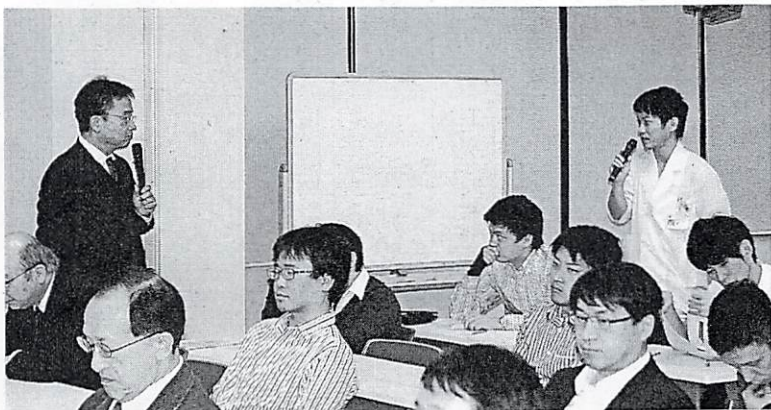
三次・庄原研修や代診医派遣取り決め

中国地方で都市部に医師が偏る地域間格差が広がる中、中山間地域の三次、庄原両市で、医師不足を乗り越える新たな試みが進んでいる。市域を越えて医療機関が連携して協議会をつくり、技能アップに向けた研修会を開いたり、遠方に研修に赴く医師の穴埋めを別の医師がする取り決めをしたりしている。専門家からは、継続するための行政の支援強化を求める声が出ています。(鴻池尚)

8日夜、庄原市の庄原赤十字病院の会議室。三次、庄原両市の医師約40人が、認知症ケアに関する市立三次中央病院の医師の講義を熱心に聞いていた。1月にスタートし、3回目となった「初期診療セミナー」。専門の医師が講師を務め、小児救急などを取り上げた初回は79人、皮膚科診療などをテーマにした2回目は62人が受講した。

現場発 2016

医療維持へ医師ら連携



参加した男性医師30人は「夜間や休日の当直に入ると専門外の対応も必要になる。日頃困っている内容が多く、助かる」と喜ぶ。

■県基金で活動

セミナーを主催するのは、両市内の6医療機関の医師と県地域医療支援センターの職員でつくる医師育成

協議会設立 勤務しやすい環境整備

・活躍支援協議会。昨年11月に発足し、市立三次中央病院が中心的な役割を担っている。地域医療の確保を目的にした県基金を財源に活動している。

■「支援不可欠」

若手医師が研修先の医療機関を選べる臨床研修制度が導入された後、中国地方で医師の偏在が進む。広島県内では、中山間地域の医師数が制度導入前の2002年の529人から14年は464人と65人減る一方、都市部の広島、福山市市では計646人増えた。人口減少が進む山間部や島で医師確保の道筋が見えない

充実を求める声が大いことから、今後は、セミナーに加え、専門外来など実地での研修も企画していく考えだ。

中、協議会は連携して地域の医療水準を守ろうとしている。

診療所などの医師が、県外などで開催される研修に参加する場合、両市内の基幹病院から代診医を派遣することも協議会では申し合わせている。永沢副院長は「過疎地に来る医師に孤立感を持たせないことが大切。限られた医療資源を有効に活用して勤務しやすい環境を整えていく必要がある」と力を込める。

来春からは、卒業後に地元で一定期間勤務する広島大医学部のふるさと枠の医師が本格的に現場に出る。少子高齢化が進む地域の期待は大きい。県医療介護人材課は「地域で医師を支える態勢を整えれば、若い医師の定着にもつながる」と説明。県内では、安佐市民病院(広島市安佐北区)を中心に、同市北部や芸北地域でも同様の取り組みが進んでいる。

庄原赤十字病院で8日にあったセミナーで、講師役の医師(奥左)に質問する医師

地域医療のシステムに詳しい広島国際大医療経営学部の江原朗教授(医療政策)は「いかに継続できるかが課題。中心的な人が変わっても、続けていける体制づくりが求められる。県など行政の財政面での支援も欠かせない」と指摘している。